吟香会報

編集・発行
岸田吟香を語り継ぐ会
2025年9月1日
発　足
2020年4月1日
事務局
岡山県美咲町
山本登志夫
090-1015-2367

岸田吟香の精錡水と『大坂日報』

孫文記念館（国重要文化財）
主任研究員　蒋 海波（神戸市在住）

精錡水をはじめ、西洋由来の医薬品の開発と販売に成功した岸田吟香は、大阪での販路拡大にも力を注いだ。その主な方法は新聞での広告掲載と代理店との連携であった。新聞紙による薬の宣伝については、すでに指摘されたように、吟香は明治四年八月から、『東京日日新聞』『横浜毎日新聞』『郵便報知』など京浜間各紙の広告欄に、単に精錡水の効用だけではなく、眼病の原因やその予防と治療など、知識の普及を主眼とする広告記事を掲載した。

一方、明治九年二月に創刊された『大坂日報』においても、吟香は精錡水の広告を戦略的に掲載した。まず、明治十年二月八日の同紙附録では「目薬精錡水　本家東京銀座二丁目　岸田吟香謹製　西洋大医の新発明にして一切眼病に用ひて神効無比の良剤なること世上の知る所なり」という短い文言で、ほか数社の薬広告と並んで掲載している。その次、同年六月からは、イラスト入りの精錡水広告が登場しはじめた（付図参照）。薬の効用とともに、記事の最後に取次所の所在地や店主の情報もあわせて掲載し、大阪の読者がその薬を求めやすいポイントをアピールしている。このように地元業者との連携による販路拡大の試みは、すでに慶応四年一月から三月にかけて、二度目渡華の際、上海で実践された効果的な方法である。

○此御目ぐすりハ美國の大醫平文先生より直傳の名方にして日本國中たゝ我ゞ一家の外ハ決して翻ゟ如無之ハ實ニ目藥中の第一等なる者なれバ別能の英明あるハ素より世間の遍く知る所なり各府縣下ハ新多の取次所ハ有れ間御求め下さるべし
○書し御近遠ゟ取次所ハ無くハ私方ゟ御送り届ケ申ス丈ケ速ゟ御送り届ケ申し上べくし間ハ多少ハ拘らず御慮ハ御下さ御用ひ御試し下さるべくし
○御取次諸賣成さ所御方〻ハ私方まで御文の通り一切の諸賣約定書ハ外取次賣弘方規則書ハ及び着版引札の雛形等を御送り届ケ申し上べくし間御規則の通り夫〻御手配のうへ早〻受賣方御盡力ください
○近ごろ我が精錡水の名と擬し瓶の形ハ能書まで並を紛ハしき疑似の藥を賣る者ある由に付き御求の御方〻ハ能〻吟味ゟ下さる私方の記号を御認見の上ゟ買ハ本舗の精錡水かゟと御承知ください
の効驗の英明あるを御試し下さるべくし
東京銀座二丁目一番地　大阪大取次所　岸田吟香再稟

ジョセフ彦記念会と意気投合！

私たち岸田吟香を語り継ぐ会員五人は、五月二十五日、豊田市博物館で行われた開館一周年記念・岸田吟香と岸田劉生展を視察。目的は、美咲町から岸田吟香記念館所蔵の展示物「吟香像」「ウースン日記」の展示と「開運なんでも鑑定団」でお馴染みの鑑定士・愛知東邦大学客員教授・増田孝氏の講演を聴くことだった。

講演の中で、増田教授は「岸田吟香に宛てた日下部鳴鶴の手紙」、この文書の文字一つ一つから伝わってくる呼吸を感じてほしいなどと話された。

その夜は、心待ちにしていたジョセフ彦記念会（本部所沢市）との交流、居酒屋で三時間以上にも亘り情報交換した。

ヒコも一時期大河ドラマの動きもあったと聞くが、関東と関西、播磨を含め更に結束を強化しようと意気投合。現在のマスメディアの根幹をつくった二人の偉業を全国に発信するよう堅い契りを交わした。

彦記念会と交流する語り継ぐ会のメンバー

さらに、明治十一年一月二十九日『郵便報知』紙につづき、同年二月七日『大坂日報』の附録として、吟香の筆による「楽善堂養生話」と「官許楽善堂三薬　発売広告」と題する全面広告が掲載された。前者は七六〇〇字ほどの長文で、もっぱら食生活や居住、運動、着衣、沐浴などの健康的な習慣をいかに養うかを説く論説である。後者は楽善堂の「鎮餾飲」「穏通丸」「補養丸」「玉兎膏」「天保膏」、そして精錡水の効用を広告している。「養生話」には、「世人の幸福を謀る心得」をもって、皆様がこの養生話をよく御用い下さることを希望しているほか、吟香は自ら上海の恵済医院での体験を披露し、多くの中国人の胃腸病患者を治った「三薬」（鎮餾、穏通、補養）を良薬として紹介し、その効用を説いた。

このように、医薬人、新聞人、そして医薬文化の交流を通じて、日中連帯の道を探ろうとした興亜の人・吟香の躍如した面目を、これらの型破りの新聞広告から読み取れよう。（付図は明治十年六月八日の紙面を採録した。）

蒋海波略歴

1963年中国上海生まれ、1990年来日。神戸大学博士課程修了、現在孫文記念館主任研究員。専攻は中国近現代史、日中文化交流史、日本華僑史。

日本で二番目、「訓盲(唖)院」吟香さんの心に魅せられて

令和六年十一月七日、手話サークルかけはし一日研修旅行で、会員と共に岸田吟香記念館を訪れ見学させていただきました。

サークルのろうの会員から是非みんなで行きたいとの事で、今回の研修旅行が実現しました。その方は残念ながら都合で参加出来ませんでした。

盲唖者の為に日本で二番目（一番目は京都）に「訓盲院」を創った偉人が岡山の美咲町出身だった事を皆に広めたかったのであろうと思います。

参加者の感想の一部を紹介します。

●吟香が成し遂げた数々の業績に感服致しました。特に当時の漢字だらけの文語体を口語体に改め大衆化に力を尽くした事、吟香の真の人間性に触れた気がします。

●岡山に四十年住んでいますが、吟香さんの事を初めて知りました。山間部の小さな村で、激動の時代を生き抜いた吟香さん。県民の遠慮がちな性格の人が多い中、「埋もれてしまった感」があります。県や国、民間を巻き込んで、もっと伝承していくべきです。

記念館前で、ハイチーズ「パチッ」

●語り継ぐ会に若人を呼び込みもっと活動を広めていただきたいです。いつか大河ドラマに登場させるとか、特別番組をやるなど。銀行券印刷時には、吟香の肖像を使ってほしい。だって、吟香は渋沢栄一に負けていませんから。

●岡山にこんな偉大な方が・・・感動。そして、語り継ぐ会の皆さまのおもてなしに感動しました。本当にありがとうございました。

機関紙「手話サークルかけはし」より
代表　中山咲江
（岡山市北区在住）

「吟香没後百二十年を偲ぶ碑」除幕！

六月十四日（土）、旭地域多世代交流拠点「あさひなた」において、「岸田吟香没後百二十年を偲ぶ碑」の除幕式が、厳粛かつ盛大に行なわれた。

これは、幕末から明治期、西洋文化を一早く取り入れ、日本の近代化に縦横無尽に手腕をふるった岡山県美咲町出身の偉人・岸田吟香、本年六月七日が没後百二十年にあたることから企画されたもの。

吟香の顕彰にあたっては、明治四十五年、東京都内の篤志家が墨田河畔に記念碑を建てて以来、今日まで多くの先人たちが顕彰してきたが、昨年九月の世話人会で話題になり更に継承していこうと準備を進めてきた。

除幕式には、青野高陽美咲町長をはじめ松島啓議会議長、藤原敬三教育長、加原奎吾顧問（前会長）、また吟香の五男・辰彌（宝塚歌劇団の演出家）の孫にあたる画家・岸田尚さん（東京都在住）ら招待者十六人、一般参加者も含め約四十人が同席し執り行われた。

まず、青野町長らによるテープカット（除幕）が行なわれた後、主催者として挨拶に立った草地浩典会長は、「吟香の偉業は明治から昭和、令和へと語り継がれ百十年以上になるが、今日の日を忘れず更に顕彰活動を充実させていきたい。」と抱負を述べた。事務局からも今日に至った経過報告があり、来賓からも祝辞が述べられた。

完成した顕彰碑は、花こう岩一・一tを使用し、本体の高さ一五〇cm、巾四〇cm、奥行二五cm、基礎石の高さ五〇cm、幅八〇cm、奥行六五cmで、全体の高さは二、〇mになる。また、柱の前面上部には、黒御影石で作られた吟香の肖像画プレートがはめられ、その下に「岸田吟香没後百二十年を偲ぶ碑」、右側面には、吟香の口ぐせであった「大魚は小池に游ばず」、裏面には建立年月と語り継ぐ会の名称が彫られている。製作費は六十五万円、㈲内田石材（美咲町）に依頼したものだが、それ相当に貫ろくがある石碑に仕上げられている。

式典最後には、岸田尚さんから「曾祖父は私の心の支えです。招待していただき有難うございました。」と謝辞があり全てが終わった。

この日にあわせ東京から来た尚さんの母・岸田悠喜子さん（美咲町出身）は、「月日の経つのは早いものです。でもこうやって地元のみなさんが、懸命に顕彰してくださり頭の下る思いです。」と話していた。

編集後記

会報第十三号をお届けします。皆様方のご意見・ご感想をお待ちしております。　山本

特集

「孫文記念館（移情閣）」

孫文記念館は、兵庫県神戸市垂水区の舞子公園内にある博物館です。旧称は孫中山記念館（そんちゅうざんきねんかん）。八角形の中国式楼閣『移情閣』は、1915年築の現存する日本最古のコンクリートブロック造建造物で、国の重要文化財に指定されている。

施設の概要

辛亥革命の父と仰がれる孫文（孫中山）を顕彰する日本で唯一の博物館として、神戸潜伏中の彼をかくまった川崎重工業の松方幸次郎との縁もあり、1984年に開設された。

建物は、華僑の貿易商で相場師の呉錦堂（1855～1926）の舞子海岸にあった別荘「松海別荘」内に1915年に建てられた八角形の中国式楼閣「移情閣」（六角に見えることから六角堂と通称される）と付属棟など。

建物は、1890年代に現在の付属棟が建てられ、移情閣等が大正時代に新たに建てられた。舞子公園内には2000年に移築された。松海別荘は、1913年に孫文一行が神戸を訪れた際の歓迎会の会場であった。現在、館内の壁面は復元製作された金唐革紙（手製の高級壁紙）によって装飾され、孫文の著作や遺品など貴重な資料が展示されている。また自筆の石碑「天下為公」も残っている。

呉錦堂（1855－1926）
浙江省出身の貿易商で相場師。1885年に来日し1904年に日本に帰化、行商から中国綿花の取引で成功し、鐘紡紡績、東亜セメント、小野田セメント、大阪メリヤスなど大株主となる。

楼閣の「移情閣」という別称は、窓から六甲山地、瀬戸内海、淡路島、四国と「移り変わる風情」を楽しめることから名づけられた。イギリス人建築家アレクサンダー・ネルソン・ハンセルの弟子・横山栄吉の設計で、八方どの窓からも違った景色に出合い我を忘れる、ということから「移情閣」と名づけたとも言われる。また、楼閣の外観が六角形にも見えることから地元では「舞子の六角堂」と呼ばれている。

●アクセス
ＪＲ舞子　山電舞子公園　徒歩5分
●入場料：大人300円　小人150円　定休日：月曜日（祝日の場合翌日）、年末年始
●お問合せ
公益財団法人　孫中山記念会
〒655-0047 神戸市垂水区東舞子町2051
TEL 078-783-7172　FAX 078-785-3440
HPhttp://sonbun.or.jp
https://www.hyogo-park.or.jp/maiko/
E-Mail: sunwen20@aioros.ocn.ne.jp

沿革

呉錦堂の「松海別荘」は前述のように明治20年代から建設が始められた。還暦を迎え、事業の一線から退いた呉は、1915年に、コンクリートブロック造建築としては最初期のものである移情閣を建てた。呉の没後の1928年、国道の拡幅に伴い松海別荘の本館は撤去されたが、移情閣は保存された。これは、貴重な建造物として残されたわけではなく、この建物が船舶航行上の目印となるという理由であった。

移情閣は第二次大戦中は軍の施設として使われ、戦後は呉家から神戸中華青年会に寄贈され、華僑の集会所として使用された時期もあった。しかし、1965年の台風で被害を受けてから建物は管理が行き届かなくなり荒廃、内装の一部はその過程で失われていった。その後、孫文ゆかりの地にあるこの建物を孫文の記念館として再生しようという動きがあらわれた。日中国交正常化十周年を機に機運がたかまり、関西大学教授で孫文の研究者であった山口一郎が中心となって兵庫県に働きかけた。

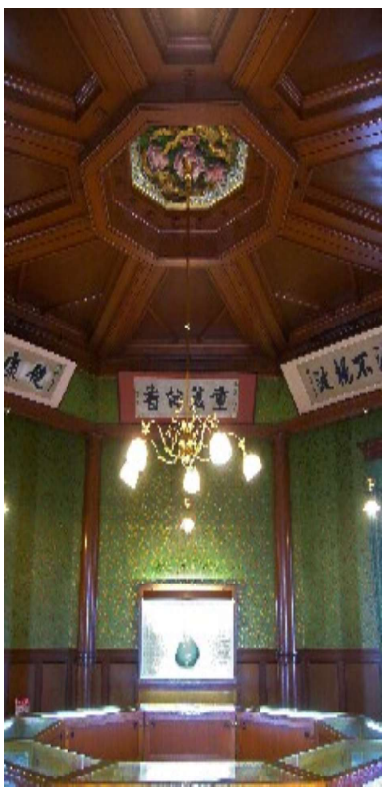
そして、1983年、移情閣が兵庫県に寄贈され、翌1984年11月12日（孫文の誕生日）に「孫中山記念館」として開館、初代館長は前述の山口一郎である。

明石海峡大橋の建設、また舞子駅周辺整備計画の一つであった国道二号線の拡幅工事を機に移情閣移転の話が持ち上がったが、コンクリートブロック造三階建ての建築を移転することは建築基準法上不可能で一時は取り壊しのうえ外観のみ復元という案も出た。しかし、1993年12月、建物が兵庫県の有形文化財に指定されたことから法規上の問題はクリアされた。

建物は1994年3月に解体に着手。この時、金唐革紙等の館内装飾・備品の復元製作が行われた。1995年1月17日、阪神・淡路大震災に遭遇するも附属棟は解体済み、移情閣も造作材が搬出済み、外壁ブロックが一部損傷する程度の被害に収まった。200m離れた現在地に移築完了したのは2000年、2001年11月14日付けで「移情閣」の名称で国重要文化財に指定された。

復原工事概要
○敷地面積：1,581.00㎡
○建築面積：368.53㎡
○延べ床面積：738.46㎡
○構造：
移情閣　木骨コンクリートブロック造　3階建
附属棟　木骨煉瓦造　2階建
管理棟　RC　平屋建

1913年3月14日、日本を公式に訪問した孫文一行は呉錦堂の松海別荘を訪れ、歓迎昼食会に出席。



日本初の邦字新聞「新聞誌・海外新聞」
慶応元年の創刊！

岸田吟香を語り継ぐ会は、令和七年六月十四日開催の第四十一回世話人会に於いて、日本初の民間邦字新聞「新聞誌・海外新聞」の創刊年について協議した結果、「元治元年創刊説」を改め、今後は「慶応元年創刊説」を採用することを決めた。

新聞の創刊年を巡ってはジョセフ・ヒコ研究者グループの「元治元年創刊説」と新聞研究者グループの「慶応元年創刊説」が明治後期以降対立して来た。歴史は真正なる新発見によって正しく改められるべきであるが、「新発見」の追認が発表されても確固たる結論が出ないまま現在に至っているのが実情である。

出版大手や書籍執筆者の多くは、「元治元年説」を採用する傾向にあったが、ここに来て風向きが変わり、従来の「元治元年説」を改め、「慶応元年説」を表明する動きが出始めているのだ。

「元治元年説」の旗手であった、「ジョセフ彦記念会」は、令和三年、休止状態にあったジョセフ彦記念会誌「浄世夫彦」の復刊を機に、昭和四十三年の新聞研究第二〇二号への、「彦の『海外新聞』元治元年説」を発表以来五十三年間標榜してきた「元治元年説」を改め「慶応元年説」の立場を表明した。また、「元治元年説」を公表していた、ジョセフ・ヒコの生誕地、播磨町郷土資料館もホームページに掲載している年表や「海外新聞」に関する記述を慶応元年に修正している。

岸田吟香を語り継ぐ会のルーツを辿ると、昭和二十六年に津山新聞記者会の提唱によって設立された「岸田吟香顕彰会」に辿り着く。

「慶応元年説」はその顕彰会が発行した、「岸田吟香略傳」に根拠を挙げて明記されており、更に翌年岸田吟香顕彰刊行会によって発行された「先駆者・岸田吟香」にもそのまま再録されている。平成元年には、旧旭町教育委員会がこれを抜粋し平易に書き改めて、「岸田吟香伝」として旧旭町の全世帯に配付したが、巻末の岸田吟香年譜には元治二年（＝慶応元年）の創刊を明記している。

最近の運用として、掲示板や冊子の表記、イベントの開催に混乱が見られ、「元治元年説」が誤用されて来たが、岸田吟香を語り継ぐ会は、この時期に初心に立ち返り、「慶応元年創刊説」を公式見解として採用することとした。

その根拠として、「ナラティヴ」の草稿の一部であるジョセフ彦の自筆メモに、「元治二年＝1864」と元号と西暦の換算ミスを犯していることが発見されていること、木版刷りの「新聞誌」第一号が発見され、「海外新聞」第一号と同一のものであることが判明していることが挙げられる。

詳細については、会報第十四号に掲載する予定です。

事務局